

# 会報

三三三号 二〇二一年五月一日

編集・発行人 支部長 佐藤秀明

## 〔巻頭言〕

### 文学研究のアピール

佐藤 秀明

文学研究も研究なのだから、何かが新しく

分からなければならぬ。昔の論文は、何を

明らかにしようとするのか書かないことが

多かった。そんなことは勝手に読み取って

くれ、という態度である。そんなことを書くの

はカッコ悪いといった美意識もあつたよう

だ。アメリカの文学研究では、何を明らかに

するのか、論文の目的をまず書き、それから

どういう方法で明らかにするのかを書くの

だと、若い頃聞いた。「ダサイね」と誰かが

言った。

いまは日本文学研究もそうだった。よいと

思う。何が新しくなったのか、はっきりした

方がよいにきまっている。

それが「日本古書通信」にあるような、同

じ初版本でも紙質の違う二種類の本がある

とか、何刷で帯がこれに替わったとか、初版

本の何ヶ月か前に見本本が造られ、奥付の異なる本が存在するとか、そういうことでもよいではないか。

近年は、研究のスタイルが枠づけられて、そういう報告のような研究があまりない。へ

タな「考察」よりは、これこれの資料を見つけたという報告が論文として通用して

もよい。だが、そうはなっていない。これでは資料を博搜する研究者を減らしかねない。

生き残る研究者は、ネットや古書目録を暇さえあれば見て、身銭を切つて、当たり前か外れ

か分からない資料を入手して、密かに喜んで、溜め息を吐いたりする人だと思ふ。

資料を発掘して、それをやや苦しげに何とか論文に組み込んだ苦心の論文も見受けら

れるが、論文のスタイルが規範化し、業績稼ぎの弊もあり、発表媒体も制限されてきて、

さまざま要因のために、「論文」の恰好をつけなければならなくなっている。その最たるものが機関誌「日本近代文学」である。

これは、文学研究を衰退させると思う。「日本近代文学」が悪いのではない。編集委員も

工夫をしている。「研究ノート」欄もある。文学研究という制度が悪いのだ。もつと自由

な研究を、と声を大にして言いたい。そうは言っても、文学研究自体が衰退を余

儀なくされているのだから、一部の研究者やマニアが知って喜ぶ報告など、「文学研究」

の世界では端っこに置かれるか、没になるか

の憂き目を見ることもあろう。

悲しいかな、われわれは、自分の論文の社会的価値を自分で測定してアピールしなければならぬのである。

## 〔支部大会・特別展示のご案内〕

### 二〇二一年度 春季大会

日程：六月五日（土）午前十一時～

場所：オンライン開催（Zoomウェビナー

を使用）

※春季大会への参加方法につきましては、

同封の別紙ならびに、関西支部公式ブ

ログをご覧ください。

### 【プログラム】

■開会の辞 関西支部支部長 佐藤秀明

■Zoomウェビナー使用について

■自由発表

芥川龍之介「尼提」の典拠と主題

高 子瑜

■小特集「これからの『羅生門』——資料と

国語教育の観点から——」

趣旨説明・司会

磯部 敦・荒井 真理亜

講演

〈羅生門〉と小説家芥川龍之介の生成

浅野 洋

発表

・国語教材「羅生門」の来歴

中田 睦美

・高校国語教材における「羅生門」の可能性——これまでの「羅生門」、これから

の「羅生門」 岩崎 俊之

■展示の案内 奥野 久美子

■閉会の辞 支部長 佐藤 秀明

【特別展示】（六月一日～二日）

恒藤恭旧蔵芥川龍之介関連史料等

・会場 大学史資料室・恒藤記念室展示（仮

）（大阪市立大学学術情報センター六階）

・時間 一三時から一七時まで（事前申込制）

### ■研究発表

〔自由発表要旨〕

芥川龍之介「尼提」の典拠と主題

高 子瑜

今昔物語に取材する芥川龍之介の一連の

作品の中で、最後を飾るものに「尼提」〔文

芸春秋』大14・9）がある。これは後に、

彼の生前最後の出版物である第八短編集『湖

南の扇』（文芸春秋社、昭二・六）に集中唯

一の歴史小説として収録された。その典拠に

ついては、今昔物語集、及び諸伝典における

尼提説話との関連が論じられてきたが、芥川

が直接利用した種本は判明していない。また、

従来の研究では、小説執筆当時に関係が深か

った片山広子との関わりに注目し、芥川の女

性関係の問題と結びつける見方が根強くあ

ったが、作品「尼提」そのものの内容に立ち返ることで、見えるものはないだろうか。

本発表では、常盤大定編『仏伝集成』（丙午出版社、大二三・一）を参照して小説「尼提」を再考する。両者の類似性を見れば『仏伝集成』が「尼提」の直接的な典拠であることは、ほぼ確実である。従来、「尼提」には芥川の解釈が格別加えられてはいないと考えられてきたが、『仏伝集成』における「尼提」との比較検討により、芥川「尼提」の創作部分が浮き彫りになる。創作部分には、主人公尼提へ浴びせられる視線に芥川独自の解釈が潜んでいることを指摘することができる。本発表では『仏伝集成』が芥川「尼提」の直接的な典拠であることを検証しながら、その結果を踏まえて作品の解釈を試みる。

### ■小特集「これから」の「羅生門」——資料と国語教育の観点から——

〔企画趣旨〕

本大会では、会場校による特別展示の中心が「羅生門」にかかわる芥川龍之介の直筆所管であることから、「羅生門」についての講演、教材としての「羅生門」について考察する報告、および、高校の国語教育現場での「羅生門」授業の実践報告、の三本からなる、「羅生門」をテーマとした大会を企画した。

講演は、論文「芥川龍之介——『羅生門』をめぐって——」（『日本の説話』第六巻（近

代）、一九七四年三月、東京美術）をはじめ、長年のご研究において、芥川書簡等の資料も活用しながら「羅生門」をたびたび論じてこられた、近畿大学名誉教授の浅野洋氏に依頼した。浅野氏には、恒藤記念室所蔵のスケッチについての紹介「新資料紹介 恒藤恭の肉筆スケッチ・ブック 6冊」（『国文学解釈と教材の研究』一九九二年二月）もあり、特別展示との連携も考えて、ぜひにとお願いし、お引き受けいただいた。

また、「羅生門」は言うまでもなく芥川の代表作であるだけでなく、高等学校国語教科書の〈定番教材〉としてあまりにも有名な作品である。そこで、高校の国語教育に関わる方々にも関心を持っていただけるよう、教材としての「羅生門」を考えるための報告を、近畿大学教職教育部教授の中田睦美氏にお願いした。中田氏には論文『「羅生門」のゆくえ——国語教材と文学テキストの間』（『近畿大学教育論叢』二〇〇九年三月）や、著書『芥川龍之介の文学と〈噂〉の女たち——秀しげ子を中心に』（翰林書房、二〇一九年七月）もある。

さらに、高校の国語教育の現場から、京都府鴨沂高等学校国語科教諭の岩崎俊之氏に、「羅生門」の授業実践報告をお願いした。岩崎氏のご紹介はプロフィール欄をご覧ください。いただきたい。なお、質疑応答の時間ももうける予定であるが、関西支部ではオンライン上で

の学会開催が初めてとなるため、種々滞りが生じた場合は御容赦ください。

大会において、「羅生門」に関する講演と、教材としての「羅生門」考察、および教育現場での実践報告を聴き、議論された後には、翌週、大阪市立大学へと足をお運びになり、特別展示を通して芥川の筆遣いを感じていただきたい。

二週にわたる企画となったこの大会が、近代文学研究において資料が持つ力や役割、資料と研究の関係、また資料・研究と国語教育のつながりについてなど、これからの研究や教育にむけて、「羅生門」についてあらためて感じ、考えていただくきっかけとなれば幸いです。

### 大阪市立大学 大学史資料室・恒藤記念室特別展示について

大阪市立大学 奥野 久美子

一昨年四〇周年を迎えた日本近代文学会関西支部の大会が、大阪市立大学で開かれるのは初めてのことである。二〇二二年四月に大阪府立大学との統合が決まっていることを考えれば、「大阪市立大学」（以下本学）での開催は最初で最後となる。

一方で、『日本近代文学』では、第一〇〇集を迎えたことの記念として別冊『近代文学研究における〈資料〉の可能性——全国の文学館・記念館アンケート収録 附：索引』が

二〇一九年五月に刊行され、同誌第一〇一集（二〇一九年十一月）では、特集「近代文学研究における〈資料〉の可能性」が編まれた。

学界ではあらためて作家や作品にかかわる一次資料とその研究への活用について考える機運が高まり、また、資料を収集・保管・活用する文学館・記念館にも注目が集まっている。

そこでこの機会に、本学所蔵の近代文学関連資料の特別展示を企画した。特別展示は、本学の初代学長（学長在任：一九四九～一九五七年）で、芥川龍之介の親友であった、法哲学者 恒藤恭（一八八八～一九六七）を記念した恒藤記念室、および大学史資料室、学術情報総合センターの協力により、開室準備中で未だ一般には非公開の展示室を一時的に借りて行う。

恒藤記念室は、恒藤学長が一九六六年、文化功労者として表彰されたことの記念として開室が準備され、一九七一年に開室。一九六六年、本学学術情報総合センターの完成にともない、同センター六階の現在の位置に移転した。恒藤学長のご遺族である恒藤家から数次にわたり寄贈・寄託を受けた資料を基本に、その他の個人・組織などからの寄贈、および記念室の独自収集による資料もあわせ、約四、〇〇〇点の資料があり、詳細な目録『大阪市立大学恒藤記念室所蔵資料目録（増補改訂版）』（恒藤記念室叢書5）も作成されている。

る。

中でも芥川龍之介に関する資料は、芥川と恒藤が親交を結んだ第一高等学校時代の日記『向陵記』が、大学史資料室の編により『向陵記』恒藤恭一高時代の日記』(二〇〇三)として翻刻、刊行されているが、その原本のノートが今回の特別展示に含まれる。

また、芥川から恒藤へ送られた書簡一〇〇点余りも、二〇〇八年に恒藤家から記念室に寄託されており、これが今回の特別展示の中心である。今回展示される書簡は、芥川龍之介の全書簡の中でも特に有名な書簡である。結婚したいと思った女性を、家族の反対で諦めたという、いわゆる〈失恋事件〉について

恒藤(当時は井川姓)恭に書き送った、大正四年二月二十八日・三月九日両日の書簡である。これらの書簡が特に有名であるのは、この

〈失恋事件〉が「羅生門」執筆のきっかけとなったとされているためで、研究史においても、「羅生門」の執筆動機について言及される際には、必ずといっていいほど引かれてきた書簡である。どちらの書簡も、挨拶すらなくいきなり本題に入っている。乱れた心がそのまま表れた文体と直筆文字の迫力を、ぜひとも原本で感じていただきたい。

\*\*\*案内\*\*\*

特別展示で展示する資料については、以下のとおり予定しています。

・芥川龍之介の書簡二通：「羅生門」執筆のきっかけとなった〈失恋事件〉について井川恭に書き送ったもの(一九一五年二月二八日・三月九日)。

・谷崎潤一郎・新村出あてハガキ一通：大阪市立大学学術情報総合センター・新村出文庫収蔵書の中から発見されたもの(一九四八年八月七日)。

・佐々木信綱・新村出あて書簡一通：同右、新村出文庫収蔵書(一九四四年六月一日)。

・恒藤(井川)恭「向陵記」原本：一高時代の日記。

・菊池寛・恒藤恭あて書簡一通：滝川事件で京大を退職した恒藤恭を文藝春秋社へ誘う内容(一九三三年七月二十五日)。

※特別展示は、学会日翌週の六月一日(金)と一二日(土)の各日一三時から一七時までの限定公開です。一七時に閉室いたします。現コロナ禍により、事前申し込み制とし、入場人数制限を設けております。お申込み頂きました時間に合わせてご来場ください。

ご来場の際には、お申込みの時間内に学術情報総合センター一階ロビーで受付を済ませていただき、エレベーターで六階におあがりください。一階ロビーと六階展示室前に受付・案内スタッフを配置いたします。また、学術情報総合センター内では、六階展示室以外のフロアへの立ち入りはご遠慮ください。

## 【書評】

太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄 編

### 『高橋和巳の文学と思想——その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』

梶尾 文武

歿後五〇年を迎え、高橋和巳の読み直しが進んでいる。新編のムック『高橋和巳——世界とたたかった文学』(河出書房新社、二〇一七年)や、清真人の名著『高橋和巳論——宗教と文学の格闘的契り』(藤原書店、二〇二〇年)と並び、本書は、高橋和巳再評価の起爆剤となる一冊である。

三編の遺稿のほかに、二四名の執筆者による評論・エッセイを収める本書が提供する論点は、多岐にわたる。高橋の小説の多くは、隠蔽してきた暗い過去を知られた主人公が自己崩壊に見舞われ、尽きせぬ苦悩を経て破滅してゆくという筋立てをとる。本書では、多くの論者が高橋のこの物語定型を留意した文壇デビュー作『悲の器』に関心を寄せており、主人公が親炙する「現象法的法学理論」に注目する鈴木比佐雄、論理のひとつである主人公が例外的に流す涙の意味を問う橋本安央らの論考が、作品解釈を更新している。

『悲の器』に続く高橋の作品群は、如上の物語定型を昭和期日本の歴史に重ね合わせてゆく。たとえば「散華」や「墮落」では、戦争の時代の暗い体験ゆえに戦後の日常から

ら自己を疎外する人物、『憂鬱なる党派』では戦後革命運動の挫折体験に縛られ続けるがゆえに社会から落伍する人物の内奥の暗部に光が当てられる。重要なのは、こうした物語の構図を「中間小説」的なパターンと捉え、「高橋和巳の小説論の核心は抽象的な命題を具体化、平俗化して示すことにあった」と見る鈴木貞美の視点であろう。あるいは、高橋の可能性の中心を物語よりも文体に求め、多様なジャンルの文面を異なる文体で書き分けた『邪宗門』を「言語的全体小説」と呼ぶ井口時男の論点も、きわめて示唆的である。

かつて久野収は北一輝を論じた際、中国から見たこの革命家の像を捉えることが出来なかったことを憾みとし、高橋の北一輝論によつてこの空白が補われたことを歓迎した。高橋和巳論においても、中国を視点とした把握は課題として積み残されてきた。池田恭哉、関智英らの論考は、その空白を補う点で貴重である。巻末に付された書誌・年譜も詳細をきわめている。一九六〇年代の文学史において高橋和巳という存在が占めた重要な位置、そしてこの存在が抹消されたことの意味について問い直す契機を与えてくれる一冊である。

(二〇一八年一月一日

コールサック社 二二〇〇

円十税)



## 『上海の戦後 人びとの模索・越境・記憶』

矢本 浩司

戦後の上海に光を当てる高綱博文・木田隆文・堀井弘一郎「編」『上海の戦後 人びとの模索・越境・記憶』は、戦後上海史の概説書の類ではない。上海を生きた具体的な人びとの「模索」「越境」「記憶」に意識を向け、戦後上海を描き出そうとする（リアル）な書物である。まるでさまざまなものが衝突して激しく弾け続けている容器のような空間である上海の戦後を明らかにするために、渦中を生きた個別の人びとにスポットを当て、多角的に写し出す試みがなされている。専門領域を横断していずれ劣らぬ日中の研究者らが名を連ね、さらには、前上海総領事、美容師、漫画家などの多彩な顔ぶれが並ぶ。論考に加えて、コラム、インタビュー、写真などの資料も充実させている。この試みは功を奏していて、この一冊の書物に戦後の上海が徻めいてみえる。

三部構成の「第一部 人びとの〈模索〉」

と「第二部 〈越境〉の軌跡」には、漢奸として裁かれた盛毓度、戦時上海の「文化漢奸」

たち、資本家の劉鴻生、義肢の音楽評論家シヤルル・グロボワ（高博愛）、上海話劇、キリスト教、戦後上海におけるユダヤ人、朝鮮人、欧米人、残留日本人などに関する色とり

どりの論考が寄せられている。「第三部 〈記

憶〉の再編」には、堀田善衛、武田泰淳、生

島治郎、小泉譲、村上春樹などの日本文学

者の作品を扱う論考が配置されている。総勢

二九名にのぼる執筆陣をここに列記する余

裕はなく各論の紹介は控えるが、そのほとん

どが、私には勉強になるものであった。特に

個人的に関心を持ったのは、藤原崇雅氏の

「上海ノスタルジーのゆらぎ——武田泰淳

『上海の蜩』における回想の方法」である。

藤原氏は、武田泰淳「上海の蜩」の回想形式

が「過去構成のメカニズムを顕在化」させて

いることに言及し、「過去を言説化する際の

規制を問題化した批評」でもありと主張する。

武田泰淳「上海の蜩」が小説の方法について

のメタ小説であることを指摘するものであ

り、武田泰淳の現代文学としての可能性の一

端を強調するものとして、私には興味深かつ

た。なお、本の厚みに比して執筆者が多いた

めか、紙幅に不足を感じる論考もあったこと

を最後に付言しておく。

(二〇一九年七月三十一日 勉誠出版 二八

〇〇円十税)



## 『せとうち文学叢書呉・江田島・芸南編』

VI〜VIII

藤原 崇雅

本叢書は、瀬戸内地方のうち、呉や江田島を含む芸南地域が描かれた文学を再録し、解題を付したものである。芸南地域といえ、数多くの港がある土地としてイメージされるが、色鮮やかな装幀の頁を開くと、その土地がいかに数多くの書き手を惹きつけてきたかが分かる。本書評で言及するのは叢書のうち、第VI巻「若杉慧「エデンの海」、第VII巻「田中小実昌集」、第VIII巻「昭和戦後集」であるが、この三冊に限っても、小説、俳句、短歌、詩、エッセイなど、多岐に渡るジャンルの作品が収録されている。

この叢書の特徴は、呉工業高等専門学校の学生たちが編集に協力していることである。編者は同高専で教鞭をとっておられた方だが、収録作の本文校訂や改題執筆は教え子である学生らによって行われている。「読書会（報告風コラム）」（第VIII巻）では、叢書が作成される過程が振り返られており、興味深い試行錯誤しながら執筆したこと、作品に登場する土地を皆で散歩したこと、地元の書店の方と度々交流したこと、そうした活動が三年間続けられたそう。この叢書は、貴重な教育実践の結果として読むことができる。

学生らとともに選ばれた収録作品は実に

多種多様だ。多島美を詠んだ吉井勇の短歌が

あるかと思えば（第VI巻）、戦争当時を批判

的に回想しつつ江田島を行く大庭みな子の

エッセイもある（第VIII巻）。田中小実昌の小

説には、寄港する船員を相手として独特の商

売を行う女性がいたことも書かれている（第

VII巻）。瀬戸内という地域は、歌人を惹きつ

けた一方で、近代化の影響を大きく受けても

いたのである。こうした内容の多様さは、教科

書には載らない多くの作品に学生が感銘

を受けたことの証左でもあるだろう。

また、この叢書は文学研究としての着実な

成果も挙げている。解題では、作者の経歴を

踏まえた考証や作品の主題に関する考察に

も多くの紙幅が割かれている。例えば、第VII

巻の解題では、呉における田中小実昌の郷土

作家としての側面についての論及がある。恥

ずかしながら、私自身はこれまでこの作家の

作品を読むとき、舞台のことを深く考えてい

なかった。しかし、解題とあわせて作品を読

むと、代表作である「ポロポロ」の石段をは

じめ、小実昌が呉周辺の風景を詳細に描写し

ていることが理解できた。収録作品について

の新たな見方を示していることも、この叢書

が刊行された意義である。

なお、この叢書は一般向けに販売されてい

る刊行物ではないものの、国立国会図書館や

日本近代文学館など、国内のいくつかの機関

には所蔵されている。最後に叢書全冊のタイ

トルと収録内容を紹介しておくので、教育実践や作品解説について知りたいとお考えの読者はそれらの機関で手にとり、瀬戸内の風景に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

第一巻「明治・大正・昭和集」（正岡子規の俳句、岩田豊雄の随筆、塚本邦雄の短歌ほか）、第二巻「宮近嘉六集」（「職工の宿」、「呉ほか」）、第三巻「本地正輝」「群生」（「表題作ほか」）、第四巻「本地正輝／亀屋原徳集」（「群生」、「島の人々」ほか）、第五巻「濱丘浪三」「芸南幽鬼洞」（「表題作」）、第六巻「若杉慧「エデンの海」（「表題作」、「中学生と女学生」ほか）、第七巻「田中小実昌集」（「港のある町で」、「ポロポロ」ほか）、第八巻「昭和戦後集」（山口誓子の俳句、大庭みな子の随筆、井伏鱒二の随筆ほか）。

（二〇二〇年一月〜四月 せとうち文学叢書刊行会・甘茶書店 非売品）

斎藤理生 著

## 『小説家、織田作之助』

浅岡 瑠衣

織田作之助は「夫婦善哉」の作者として関西ではなじみ深い人物である。本書では、彼が残した作品や評論、新聞小説をもとに小説家としての工夫を探っている。三部、十四章の構成で一章ごとに異なる作品を取り上げ、それぞれに違う視点からその手法について考察している。また、本書は、学術誌に発表

された論文をもとにしているが、一般向けにテキストに立ち返り分析されている。

第一部では代表作を取り上げ、どのような手法が使われたかを考察している。「夫婦善哉」「世相」「可能性の文学」を取り上げての分析である。手法の一つとして「固有名詞の列挙」により「小説を読む時間にスピード感を与えている」と指摘している。他にも作品に描かれる色彩や繰り返し使用される表現に注目し、それらを戦前戦中から戦後の「反復とずれの関係」として作之助は捉えていることを明らかにした。「可能性の文学」では、棋士・坂田三吉の「端歩突き」という奇抜な手法を取り上げることで、日本文学への「革新的な方法への探究」を示唆しているという。第二部では創作方法について明らかにしている。前半は、昭和初期のルポルタージュや江戸時代から伝わる奇談や落語を踏まえた作品について触れ、作之助の作品は扱う内容を取捨選択し、オリジナルの作品を作り上げたことと指摘した。後半では、作之助と交流のあった太宰治や作之助と同様に大阪を題材に作品を書いていた宇野浩二の参考にした小説について考察している。第三部は新聞小説についてだ。第一章の中で『大阪新聞』の記事と連動させ「清楚」を書き上げたことを指摘し、第二章では新聞小説を単行本に収める際に、主人公よりも世相を描くことを意識していることを明らかに

した。第三・四章で京阪の新興新聞に「現実」を書く難しさを考えさせる新聞小説を書き権威への批判を示したこと、紙面との関連性を持たせる小説を描くことでメディアの寵児となったことを指摘した。第五章では『読売新聞』に連載した「土曜夫人」について「一回一回をそのつど楽しめば」よい小説であり、「偶然」を許容する小説であったとしている。

本書に共通する問題意識は「小説のスタイル」である。新しいスタイルを求め続け、文壇に挑戦し続けた作之助の姿を、本書は緻密な分析により鮮やかに浮かび上がらせている。

（二〇二〇年一月二二日 大阪  
大学出版会 一三〇〇円＋税）



永瀬朋枝 著

## 『無名作家から見る日本近代文学——

## 島崎藤村と『処女地』の女性達』

細川 正義

本書は著者が二〇〇四年七月に発表した『新生』にみる手紙の虚実から、二〇一八年五月発表の「メディアにおける女性作家達——藤村発行『処女地』執筆者群の調査より——」までの労作を二二章で構成し、書き下ろしの序章を加えてまとめたものである。著者は『新生』にみる手紙の虚実」の最終節で、

『新生』は、「死」に脅かされ「死んだ沈黙」（序・五）に陥っていた岸本が、節子との関係を「懺悔」として公表することによって「生きて出」ることができた、ということを描いた小説である。

としている。そして第二章において、『新生』が読者に受け止められたのは当時の時代が「告白が求められる時代」であり、その「時代に見合った題材を提供し、しかもそれが深刻な題材だった」ことが原因しているとも論じている。

著者は本書の方向を概括した序章で、本書は「日本近代文学が時代やメディアによってどのようにつくられたのかを説明することにあるとしているが、『新生』で節子の手紙を用い「一方的な一途さをいわば利用して」作家として生きのび甦ることを達成した

ように、藤村が近代日本文学を代表する作家たり得た要因として、作者が時代やメディアにどのようなかわり、対処してきたかが大きな影響を与えていると考えられ、それは藤村にかかわらず文学に携わろうとした多くの人物から窺えるとして、藤村が「新生事件」の深い懺悔の思いから発刊した『処女地』に関わった女性達を分析し考察している。

本書のメインは第二部、第三部に取り上げた『処女地』の作家達と彼女達が発表したメディアとのかかわりに対する考察である。藤村が次時代への願いを込めて発表の場を

作り、女性達の自意識を涵養して成長することを願って発刊した『処女地』に執筆した女性達は五三名であった。著者は当時のメディアの動向と、彼女達の実情と創作への思いを綿密に調査分析して『処女地』と彼女達の足跡に窺える文学史的意義を明確に提示し得ているといえる。

著者が最終章において『『処女地』作家群像の軌跡からは、作家個人や個々の新聞雑誌を超えて連なるメディアの勢力によって、作家達が書くことを引き出され、選別され、方向づけられていった、日本近代文学全体の流れが見えてくる」とまとめているところに『処女地』の女性達の調査・考察に比重をおいた本書出版の意義が確認できよう。

(二〇二〇年三月五日 和泉

書院 五四〇〇円＋税)



外村彰・苗村吉昭 編

### 『大野新随筆選集 詩の立会人』

以倉 紘平

大野新氏は、詩集『家』で、一九七八年度第二八回日氏賞を受賞されているが、この本は、氏の作品を理解する上で、且つ、懐かしい人格と精緻きわまりない文体の魅力を堪能するうえで、私には大変有益であった。

改めて氏が、極めて過酷な人生を有していたことが分かる。氏は一九二八年(昭和三年)に現在の韓国で生まれ、敗戦で着の身着のまま

ま帰国するも、結核が悪化し「昭和二四年の夏、野洲川で泳いでいて、突然喀血した」「韓国から引き揚げ、旧制高知高校から京大へ入学したばかりの年で「療養所では「連日死者があいつぎ、腸結核の私もその順列のなかに組み込まれていた」とある。また別の箇所では「敗戦前後の飢餓の時期に、日本は肺病の山だった。療養所は満員で、毎日出る死者の空床を次の死者が埋めていた」とある。腸と肺の結核で、肋骨を五本切除し、下痢と血便に苦しみ、六年の療養生活を余儀なくされたというのだ。引揚げ後、父親は胃潰瘍で、母親は看病疲れで、家族の平穏な家庭生活は全く破壊されていたこと、そういうことが分かれば、例えば、日氏賞受賞詩集の題名が『家』であった理由も、私にはようやく理解できるように思う。冒頭詩「母」を引く。

〈指の爪に／のぼる白い月をみに／死んだ母がはいってくる／そして私のいっぽんの指がひかるのだ／指を垂直にたてて／深夜／梁をあげたばかりの／建てかけの家を／くぐつてあるく／母よ／いまは／干潟だ／水もしろい鳥賊もひいて／遠い月のものだ／あの月のさらにかすかな反照として／透いた家のなかに／あなたと私が／います〉

難解だが代表作というべき見事な詩だ。死んだ母親にとって、家は、永遠に建てかけたまま、平穏に暮らすはずだった家族も時間も、失われてしまったというのである。ある

べき家、まったき家族を失った母なる人に対する作者の深い愛しみが伝わってくる。時代が生んだ悲劇は、石原吉郎の八年に及ぶソ連のシベリア強制収容所経験への深い理解に通じる。同時に、師と仰ぐ天野忠の、石原吉郎にはない独特のユーモア詩への傾倒によって、肉体と精神の双方の危機を乗り越えることができたのではないか、そんなヒントも与えられた気がする。没後一〇年、彼の詩と懐かしい人間の魅力とが、この本で一層深まった思いがする。

(二〇二〇年四月八日 サンラ

イズ出版 二八〇〇円＋税)



佐藤秀明 著

### 『三島由紀夫 悲劇への欲動』

福田 涼

著者によれば、「伝」を中心とした前著『三島由紀夫 人と文学』(勉誠出版、二〇〇六)に比べ、本書では「評」により重きを置いたという(「おわりに」)。論述の軸となるのは、三島の「前意味論的欲動」である。この造語の指すところは「三島の作品や言動に表れる衝撃的で奇妙な、あるいは美しいと感じられる表現から抽出されたある傾向の総称」(「はじめに」)であるといい、本書はこうした三島の根強い情動と、「皆と同じ」(『仮面の告白』)でありたいという「希望」(第五章)との緊張関係を、各時期の代表的な作品や発言

に即して、丁寧に跡付けている。ただ、限られた紙幅で、その概要を説明することは難しい。以下では、本書の特色について、話題を絞りつつ言及したい。

著者自身は本書を「三島由紀夫の評伝を中心とした概説書」(「はじめに」)と位置付けているが、実際のところ本書には、三島に関する最新の研究成果がふんだんに盛り込まれている。『三島由紀夫 人と文学』(前掲書)や『三島由紀夫の文学』(試論社、二〇一〇)で扱われた作品に関しても、前述の文脈に即して論点の整理が施されており、『午後の曳航』や『美しい星』(いずれも第四章を参照)など一部の作品については、読解自体が大きく更新されている。「急峻な崖」と思われがちな三島作品の、いわば「岩肌」(「終章」)の掴み方を、本書は分かりやすく提示してくれているのだ。評者自身は、三島の天皇観と彼の「シアトリカル」な演劇論との共通点を浮き彫りにした第五章の論述に、とりわけ蒙を啓かれる思いがした。

また三島は小説の取材の際、「現場に身を置いて、あるいは携わった人の話を聞いて」、「描こうとする環境に積極的に身を投じて適応しようとした」(「はじめに」)というが、著者も同様にそれらの「現場に身を置いて、あるいは携わった人の話を聞く」ことによつて、貴重な成果を生み出している。こうした実地調査を踏まえ、『仮面の告白』の「原風

景」を立体的に描出した第二章の叙述は圧巻である。生身の存在としての「三島由紀夫」を知る人物が減りつつあるなかで、こうした一つ一つの証言とそれに基づく考証は、今後ますます価値が高まってゆくであろう。

没後五十年の「節目」であることも相俟って、二〇二〇年には三島に関する書籍の刊行やイベント等が相次いだ。「三島はなぜ死んだのか」という尽きぬ疑問（「はじめに」）を含む、三島に対する社会的関心に応えることが研究者の使命であるとすれば、かような社会的要請に真っ直ぐ向き合った、包括的な三島論として、本書が末永く愛されることを願ってやまない。

二〇二〇年一〇月二〇日 岩波

書店 八六〇円＋税



## 【会議の記録】

四月十八日（土）

【第一回運営委員会】総会について（総会の扱い、送付書類、総会承認の返信葉書、二〇二〇年度運営委員の役割分担、新ホームページについて、「会報」コンテンツの再確認、支部長選考委員会の立ち上げ、会費制移行の検討、二〇二一年度春季大会について、委員会運営の諸問題、会則の変更および追加変更について、今後のスケジュール。「会報」三

六月十三日（土）  
【第二回運営委員会】総会の結果（会計報告と予算案）を支部会員に報告する方法について、二〇二〇年度秋季大会（自由発表公募）の審議について、次号からの会報の形態について、新運営委員の役割分担、委員会運営の諸問題、今後の運営委員会の検討課題（「会報」コンテンツの再確認、支部長選考委員会の立ち上げ、会費制移行の検討、二〇二一年度春季大会について、会則の変更および追加変更について、今後のスケジュール。「オンライン開催」  
八月八日（土）  
【第三回運営委員会】秋季大会開催形態変更について（支部ウェブサイトへの掲載の協議、掲載内容）、「会報」三二号について（進捗状況、進行スケジュール、秋季大会のリモート開催について、「会報」三三号について（構成、書評担当者、コンテンツの確認）、交通費補助（非常勤へ）の給付について、「支部内規」に関する追記事項・緊急事態における総会の扱いについて（総会に代わる承認返信葉書の現況、返信葉書による総会議決の捉え方、総会代替措置としての会則追加案について）、次期支部長選出委員会立ち上げについて、二〇二一年度春季大会に關しての企画再検討（企画内容・スケジュール・会場の繰り延べについて、自由発表者募集）、本部との連絡方法について、運営委員会の検討課題

（二〇二一年度の秋季大会の形態、会費制移行の検討）、今後のスケジュール。「オンライン開催」  
十月四日（日）

【第四回運営委員会】秋季大会開催形態変更に伴う支部ウェブサイト掲載について、「会報」三三号について（新形態の項目や印刷方法などコンテンツの検討、書評、支部会則、会報への和泉書院広告掲載について）、交通費補助（非常勤へ）の給付について（経路申請）、交通費補助（遠隔地）の給付について、「支部会則」に関する追記事項（緊急事態における総会の扱いについて、総会代替措置としての会則追加案）、二〇二一年度春季大会に關しての企画再検討（企画の練り上げ、リモート開催の可能性、タイムスケジュール）、次期支部長選出委員会立ち上げについて、ウェブサイトでの会報掲載（「会報」三一・三二号の掲載）、運営委員会の検討課題（二〇二一年度の秋季大会の形態、会費制移行の検討、新運営委員選候補者の人選）、今後のスケジュール。「会報」三二号送付作業について。「オンライン開催」

十一月八日（日）

【第五回運営委員会】会計交通費補助について、「会報」三三号について（広告掲載ならびに書評）、「会報」三二号の宛先不明について、次期支部長選出について、次期運営委員選出について、二〇二一年度春季大会について（自由発表、リモート開催の可能性、企画委員会の結成、タイムスケジュール、大会の告知・周知について）、今後のスケジュール。「オンライン開催」  
十二月十三日（日）

【第六回運営委員会】会計交通費補助について、新規支部会員について、「会報」三三号書評欄「会報」QRコードなどについて、次期支部長選出について、次期運営委員選出について、東海支部シンポジウム案内について、二〇二一年度春季大会企画再検討について、二〇二一年度春季大会運営について（対面開催・オンライン開催、当日の役割分担、講演資料のアップ、春季大会に向けての告知周知）、二〇二一年度の秋季大会の形態、会費制移行の検討、今後のスケジュール。「オンライン開催」

二月二十一日（日）

【第七回運営委員会】会計について（交通費補助内規・会計監査・総会発議と報告方法・予算案）、新規支部会員について、「会報」三三号について（書評、編集日程）、次期支部長選出について、次期運営委員選出について、二〇二一年度春季大会について（自由発表応募者審査）、春季大会運営について（リモート開催、企画、タイムスケジュール、展示企画）、今後の検討課題（二〇二一年度春季大会について、春季大会に向けての告知周知の件、二〇二一年度の秋季大会の形態、二〇二

二年度春季大会に向けて、新運営委員長について、今後のスケジュール。

〔オンライン開催〕

三月三十日（火）

【第八回運営委員会】次期支部長選出について、次期運営委員長について、最新版名簿について、会計（監査・総会発議と報告方法・予算案）について、二〇二一年度春季大会運営について（プログラム、趣旨文、企画概要、タイムスケジュール、休憩時間）、総会開催実施方法について、今後の大会企画に向けて、「会報」三三号について（進捗状況、編集日程、春季大会印象記執筆者等）、今後の検討課題、今後のスケジュール。

〔オンライン開催〕

## 〔日本近代文学会関西支部会則〕

第一条（名称）

本会は、日本近代文学会関西支部と称する。

第二条（目的）

本会は、関西地区における日本近代文学研究にたずさわる者の相互の連絡を密にし、研究・調査活動を振興するとともに、支部会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第三条（事業）

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

- 一、総会の開催。諸問題が発生した場合は臨時に総会を開催する。議事は出席者の過半数の同意をもって決定する。
- 二、講演会・研究発表会などの開催。
- 三、会報・パンフレットなどの刊行、およびホームページなどによる広報。
- 四、その他本会会員にとって必要と認められる事業。

第四条（会員）

本会は、日本近代文学会会員のうち、原則として関西地区に在住・在職・在学する者をもって組織する。ただし会員となる者は、事務局に届け出ることとする。

第五条（役員）

本会に次の役員を置く。

- 一、支部長 一名 運営委員 若干名
- 二、運営委員は総会における会員の互選により選出する。
- 三、支部長は、運営委員によって構成された選考委員会により候補者を選出し、総会の了承を得る。
- 四、会計監査は支部長の委嘱により総会の承認を得る。
- 五、役員の任期を次のように定める。

- 1 役員の任期は二年とし、再任を妨げない。ただし連続して三期の選出は認めない。
- 2 支部長については、再任の場合はその任期を一年とし、連続して四期の選出は認めない。ただし、選任以前の役員任期を支部長任期に参入しない。

六、必要がある場合は、右役員以外に特別役員を置くことができる。特別役員は、運営委員会の議を経て支部長が委嘱する。

第六条（運営委員会）

本会に運営委員会を置く。また、本会の会務を円滑に遂行するため、事務局を置く。

一、運営委員会は支部長によって統括される。

二、運営委員会は第三条に掲げた事業を立案し、それを遂行する任を負う。

その際、必要があれば小委員会を設けることができる。

三、運営委員は事務局運営委員長を互選する。

四、運営委員は会計担当委員を互選する。

第七条（経費）

本会の経費は、日本近代文学会会則別則第四の規定と、維持会費による。（維持会

費については別に定める）

第八条（会計年度）

本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第九条（会計報告）

本会の会計報告は、会計監査の監査をうけ、運営委員会の承認を得て、総会において報告する。

第十条（会則の改廃等）

本会の会則の改廃その他重要事項の決定は、総会の議決を経なければならない。

附則

一九八四（昭和五十九）年十一月十日の大会で改正承認

一九八四（昭和五十九）年四月一日にさかのぼり施行

一九九六（平成八）年六月八日の大会で改正承認

一九九六（平成八）年四月一日にさかのぼり施行

二〇〇二（平成十四）年六月八日の大会で改正承認

二〇〇二（平成十四）年四月一日にさかのぼり施行

二〇〇三（平成十五）年十月十八日の大会で



改正承認

二〇〇三(平成十五)年四月一日にさかのぼり施行

二〇〇六(平成十八)年六月十日の大会で改正承認

二〇〇六(平成十八)年四月一日にさかのぼり施行

二〇一三(平成二十五)年十月二十七日の大会で改正承認

二〇一四(平成二十六)年四月一日施行  
二〇一九(令和元)年十一月十日の大会で改正承認

正承認、施行

### 「二〇二一年度 関西支部秋季大会研究発表募集のお知らせ」

日本近代文学会関西支部では、二〇二一年度秋季大会における自由研究発表、およびパネル発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的な応募をお待ち申し上げます。  
◆日時・会場 二〇二一年一月上旬・未定

#### 野口米次郎と「神秘」なる日本

堀まどか 欧米で日本の伝統的短評形文学や能楽がそれほど地位を得ていなかった時代に、その価値と本質を解説した国際派詩人・野口米次郎の前半生を辿り、同時代に活躍した青年たちの生きざまを探る。  
新刊・定価1760円税送

#### 結婚の結節点

結婚を相対化する主体と親密性の実践を文学作品より抽出  
泉谷 瞬 現代女性文学と中途的ジェンダー分析  
近刊・定価3960円税送

#### 大学生のための実践・日本語練習帳

安達太郎・辻本千鶴・野村幸一郎編著 大学における教育環境の劇的な変化の中、パワーポイントなどを用い、オンライン授業にも対応授業にも対応。  
新刊・定価1430円税送

#### 留学生のための 日本文学入門

青山学院大学文学部日本文学科編著 日本語の歴史や特徴、さまざまなジャンルの日本文学と、その歴史との関連、さらにその背景となる日本文化について解説。  
新刊・定価1540円税送

#### 無名作家から見る日本近代文学

永瀬朋枝 日本近代文学を無名作家群からも見渡せば、メディアにより文学がつけられていった大きな流れが見える。有名作家と無名作家、男性作家と女性作家、作家と読者との双方を見、雑誌を他の新聞雑誌との連関の中で捉える。  
定価5940円税送

#### 水上瀧太郎の文学

網倉 勲 水上瀧太郎の文学の生涯は、作家とサラリーマンの生き方を併進した事に特色がある。時代背景と作品を照らし、瀧太郎文学の本質を解明。その根底には、虚偽を糾す正義感と時流に迎合しない批判精神がある。  
定価6600円税送

〒543-0037 大阪市天王寺区上之宮町7-6  
☎06(6771)1467 FAX06(6771)1508

和泉書院

「いずみ通信」呈上 最新45号出来  
https://www.izumipb.co.jp

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお知らせいたします。

◆募集人数 自由発表 若干名/パネル発表 若干グループ

◆応募締切 二〇二一年七月一日(土)必着

◆応募要領 自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の要旨を封書でお送りください。

◆パネル発表は、発表題目と全員の発表者名、および一〇〇〇字から一五〇〇字程度の趣旨文を封書でお送りください。科研費プロジェクトの成果報告等も受け付けております。発表者数は企画者に一任いたしますが、関西支部会員を一名以上入れてください。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、パネル発表は二時間程度です。応募の際は、必ず連絡先(電話番号・メールアドレス等)も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】  
〒五五九一〇〇三三  
大阪市住之江区南港中四丁目四番一号  
相愛大学 人文学部 荒井真理亜研究室内

### 「事務局だより」

◆和泉書院の広告、および「書評」・「新刊紹介」欄へのQRコード掲載について

本号より、会報の余白を利用して、和泉書院の広告を掲載いたします。関西支部と和泉書院は、支部大会における特集企画の書籍化などの事業を通じ、長年にわたって信頼関係を築いてまいりました。また和泉書院には、支部大会のポスターを無償で制作していただくなど、多大なるご助力を頂戴してきました。こうした経緯に鑑み、広告の掲載料は無料とさせていただきます。会員の皆様方におかれましては、ご了承のほど、何卒よろしくごお願い申し上げます。

また、同じく本号より、会員の皆様方の便宜を図るべく、「書評」および「新刊紹介」の欄に、当該書籍の紹介ページにアクセスするためのQRコードを掲載いたします。ぜひお手持ちのスマートフォンやタブレット端末等よりご利用ください。

◆献本のお願  
本会報では、支部会員の皆様が発行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先：関西支部事務局  
なお、書評欄への掲載の採否および書評者

の人選については、関西支部運営委員会に、  
ご一任ください。また、献本の際には、予め  
QRコード掲載の可否を、版元にご確認ください  
さいますよう、お願いいたします。

#### ◆維持会費納入のお願い

維持会費の納入がたいへん少ない状況で  
す。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒  
よろしくお願ひします。

#### ◆二〇二一年度役員（\*は新委員）

（支部長） 佐藤秀明

（運営委員長） 荒井真理亜

（運営副委員長） 中田睦美・深町博史

（広報） 廣瀬陽一

（会報） 石原深予・川畑和成・福田涼・

松澤俊二・\*禧美智章

（書記） \*塚本章子・開信介・西菌有利・

\*宮川康・\*吉川仁子

（企画） \*浅井航洋・斎藤佳子・白方佳果

長濱拓磨・光石亜由美・\*矢本浩司

（会計・名簿） 藤原崇雅・瀬崎圭二・

\*八原瑠里、

#### ■日本近代文学会関西支部事務局

〒五五九―〇〇三三

大阪市住之江区南港中四丁目四番一号

相愛大学 人文学部 荒井真理亜研究室内